

# 国立台湾大学医学院の成立と組織の継承

——台北帝国大学医学部からの連続性を探る——

所澤 潤

## 一 課題とその背景

### (一) 問題の所在と課題

本稿は、台湾の台北にある国立台湾大学医学院（学院は日本の学部に対応。以下原則として医学院とする）が、その前身の日本統治下の台北帝国大学医学部（以下原則として医学部とする）から、教員の人事を継承し、実質的に医学部から連続する一体の組織を形成したことを具体的に示そうとするものである。

日本が一九四五年八月一日に敗戦を迎えたあと、台湾では同年一〇月二五日に受降典礼が行われ、台湾は日本の施政から離脱して中華民国の施政下に入り、続いて多くの機関、施設、資産等が接収された。日本の勅令で設けられていた台北帝国大学（以下、台北帝大とする）もまた、一月一日に接収されて、中華民国の法制下の国立台湾大学（以下、台湾大学とする）となった。台湾では、今日の台湾社会が日本統治時代から多くを継承しているという理解が、一般に広く受け入れられているが、国立台湾大学もまた台北帝大からの連続を認めていて、一九九八年一月に創立七〇周年記念式典を挙行している。そして、教育部（日本式に言えば教育省）が毎年発行する『中

『華民国教育統計』にも、やはり一九二八年設立と明記されている。<sup>(1)</sup>

本稿で注目する医学院は、一八九七年創立とされている。台湾大学が成立した当初は学院が六つあって、概ね、台北帝大にあった五学部を基に設けられたものであったが、医学院の場合は、一九三六年創立の医学部だけではなく、その起源が一八九七年にまで遡る附属医学専門部（以下、附属医専とし、台湾総督府医学専門学校等の前身校も含めて言及する場合、台北医専とする）も合併して設けられた<sup>(2)</sup>（但し、厳密に合併といえるかは、今後検討を要するが）。医学部も附属医学専門部も医師養成機関であったが、当時の学校制度の上で前者は大学レベル（高等学校を卒業して入学）、後者は専門学校レベル（中学校を卒業して入学）であった。

現在の医学院は、医学系（学系は日本の学科に相当）、牙医学系（日本の歯学科に相当）、薬学系、護理学系（日本の看護学科に相当）、医事技術学系、物理治療学系、職能治療学系の七学系から成っているが、本稿で注目しているのは医学系である。

筆者の関心は、組織の存在、そしてその仕組みや形成されたシステムが、日本の施政下から脱した台湾社会に存続したということにある。殊に、国家によって法令で設けられた機関が、他の国家に引継がれるという事態がいかに進行したかは、その関心の焦点の一つである。国家機関であれば国と国との制度的差異が鮮明になるのは当然のことだが、そればかりでなく、当事者達の心情的な面も、新制度下への移行にあたって切換えられた組織にかなり反映されたように、筆者に感じられるからである。台北帝大に限れば、接収した中華民国側の関係者が、日本の帝国大学制度とその背後の学術水準とをかなり尊重していたことや、また両国の間を移動する形になった台湾人当事者達が、両国の大学や学術水準をどのように実感していたかが、台湾大学の組織のあり方を左右したように感じられる。

現在のところ、中華民國施政下に移る際に起こった組織の継承は、日本はもとより台湾でも一般にあまりよく解明されていないように思われる。施設を伴う学校、博物館、図書館、交通機関、ダムなどに関して言及される場合、例えば、施設などの物的な面や、地域の子供達の通った学校というような社会的な機能の面は語られることが多いが、組織の内側についてはあまり踏込まれることがない。<sup>(3)</sup> 筆者の印象では、それは関心が低いからではなく、一九八〇年代までの台湾で言論の自由が制限され、その問題を表現することに様々な形での制約があったためだと思われる。<sup>(4)</sup> 台湾大学もまた、創立は日本時代に遡ることを認めていても、その仕組みや形成されていたシステムといった組織の内側が国の枠を越えてどのように継承されたかは、最近まで断片的にしか言及されていなかった。

しかし、近年では台湾大学の継承の問題は、台湾で学術研究の対象と位置づけられるようになってきている。その問題に最も早く踏込んだのは、尹章義<sup>いんしょうぎ</sup>氏の論文であろう。一九八八年に台湾大学が、台北帝大創設から六〇周年を迎えるに際して、台湾で台湾大学の創設は台北帝大創設の一九二八年に遡るかどうかが論争となった。その際に、尹氏は、法制度上の一つの論点を指摘した。それは、中華民國の行政院が台北帝大接收に五日遅れた一月二〇日に台湾大学の創設を決定したにもかかわらず、台湾大学の側では創立記念日（中国語では「校慶日」）を一月一日としていたという問題である。接收当日を大学の始まりとすると、その五日間は法的基盤がないので、台湾大学の誕生は、台北帝大の存続を暗黙の裡に前提としているという論理が成り立つ訳である。尹氏は接收を起点とする台湾大学の立場を「接收主義」となづけている。<sup>(5)</sup>

さらに、一九九六年四月に創刊された学術誌『Academia—台北帝国大学研究—』（不定期刊）では幾つかの論文で、継承がテーマになっている。<sup>(6)</sup> それは、一大学に固有の変革や維持の動きであっても、研究の対象として奥深さと広がりがあると認められるためであろう。筆者の目には、その奥深さと広がり<sup>(7)</sup>の源泉として、少なくとも次の

二つがあるように感じられる。一つは、台湾社会における台湾大学の存在の比重が非常に大きいことである。また、一つは、接取前後の台北帝大も台湾大学も、独立性の強い自律した組織になっていたため、法令の枠組みの転換や政府の指令などの外的な統制だけによって接取後の組織の切換えがなされた訳ではないことである。恐らく台湾でも、研究者は少なくとも同様の研究価値を見出していることであろう。

筆者が、台湾大学の中でも医学院に注目するのは、日本時代にすでに台湾籍の教員が相当数いたことによつて、組織の継承が教員の配置という明瞭な形で把握できるからである。つまり、医学院では、「接取主義」のような論理的枠組みではなく、実態のレベルでの連続性を人事という形で示すことができるのである。また、本稿では他学院や台湾大学全体に言及しないが、それは、筆者がその連続性を医学院よりも小さいと判断しているからではなく、いまだ判断以前の状態にあり、継承が組織の内部のどの部分にどう現れたかを見定めることができていないからである。医学院以外、また大学以外の組織については別の機会に譲ることにする。

なお、以下では、台北帝大の接取以前の時期のことを帝大時期、以後を台大時期とよぶ。また接取を境に組織が変ることを移行といい、台湾大学や各学院が設けられたことを成立ということにしたい。また、帝国大学、医科大学、医学専門学校を、それぞれ帝大、医大、医専と略称する。いずれも簡便のためである。

## (二) 説明の方法―教員人事という観点

本稿は、医学院の組織の継承の現れとして教員の人員配置に注目しているが、教員配置は、継承の単なる現象的側面である訳ではなく、継承に関してかなり本質を突く部分だと、筆者は判断している。それは、従来断片的に言及されてきた組織の継承の事例がある程度説明し直すものだからである。そこでここでは、(1)講座制、及び(2)博士

号授与の二つの例をとりあげ、その点について概述しておきたい。

(1)の講座制の継承は、台湾大学の他の学院には見られない医学院に特異な事例である。曾士榮<sup>そうしやう</sup>氏の研究によれば、台北帝大の「講座制」は、台湾大学の初期には、中華民国の大学制度との折衷的な「混合学制」へ移行したが、「講座」という名称は、中華民国の学制上では別の意味であったので、従来の講座に相当するものとして「研究室」が置かれた。そして、一九四九年に研究よりも教育を優先する「系学分制」へと移行し、旧来の講座制が実質的に消滅した<sup>71</sup>という。

しかし、医学院では、講座制の実質的な継承が行われた。関係者の回想によると、医学院では、帝大時期にすでに教授であった医学院院長杜聰明<sup>とせうめい</sup>氏が研究を重視する姿勢を貫き、研究室の教員配置を従来の講座制にならったものとし、原則として教授一名、副教授一名（日本の助教に相当）、講師二名、助教二名（日本の助手に相当）、助理若干名（中華民国の制度では技術系の職員の職名だが、当時は日本の副手に相当すると誤解されていた）を配置した<sup>8</sup>という。その配置は「系学分制」への移行後にも伝わっていくものである。そして、継承の出発点は、『移交清冊』（接収資産等の内容が書かれている）に基く人選で、一九四五年二月一日に、それまで有給の教員であった人達を教員に任用した<sup>9</sup>ことであつた。

医学院で法的な裏付けなしに、しかも全学的な合意もなく、システムが維持できたのは、医学院の教員スタッフの内に、帝大時期に既に教職を経験していた者も多く、大多数が帝大時期の講座制に慣れ親しんでいたからだと判断してよいであろう。

(2)の博士号授与については、医学院において、日本からの博士号の授与がかなり大規模に行われたことが知られている。多くの帝大時期及び台大時期初期の卒業生達が、日本へ引揚げた台北帝大の旧教員達の転入した日本の大

学から医学博士の学位を得たもので、成立当初の台湾大学が、政府から博士学位授与の機能を付与されていなかったことに、旧教員達が配慮したからだと言われている。<sup>(10)</sup> 例えば鹿児島大学では、台湾大学内科の卒業後の訓練と研究の水準を日本の大学の医学部と同等と認定し、鹿児島大学が行う口試試験と研究論文の審査のみで同大学の医学博士学位を授与するシステムを教授会決定で導入し、台湾大学医学院内科の宋瑞樓教授指導の研究人員八名に医学博士学位を授与したという。<sup>(11)</sup>

そのような博士学位授与が、医学院組織の決定もなく、私的な形で大規模に行いえたということは、医学院のスタッフの大多数が、引揚げた日本人教員の教え子である、という人員構成の継承があったからだと判断してよいであらう。

以上の二つの断片的な事実は、教員人事という視点を導入することで、共通の土台の上に現れた現象であった、と理解することができる。人事に注目することは、組織の継承に関して理解のそうした深まりを促すものである。

### (三) 日本における理解

以上に述べてきた課題の立て方は、日本における理解の現状を踏まえたものではないことに触れておきたい。

台湾に関する歴史研究は、台湾で言論が制限されていた時代には日本で進められていたものが多いが、この問題ではそうでもなく、日本ではむしろ理解が混乱している状況が見られる。例えば一九九三年に発行された『日本史大事典』の「台北帝国大学」の項では、「四五年日本の敗戦とともに廃校となったが、その施設は台湾大学に引き継がれた」と書かれ、台北帝大は存続しなかったという解釈がとられている。それに対して、一九九七年に発行された『日本史広辞典』の同じ項では、現在の台湾でひろく受入れられている解釈と同じ解釈がとられ、「日本の敗

戦後は現在の台湾大学に継承された」と書かれている。<sup>(13)</sup>

歴史事典のそのような現状は、台北帝大が、日本による台湾統治終了とともに廃校になって、施設のみ引継がれたという解釈も日本に根強く存在していることを示している。しかし、本稿の課題は、そうした日本における理解の混乱の解決を目指すものではない。そのくい違いについては、今後論点をより明確にしていけることがのぞまれるが、本稿では、存続が当然の前提となっている台湾での理解をふまえ、組織の継承の具体的な姿を示すことを課題としている。

なお、本稿の問題意識と相容れない廃校という解釈は、必ずしも事実誤認によるものではなく、接収と、台湾にあった官署の廃止との意味付けの違いから生じているように思われる。台湾総督府を始め、台北帝大や各官立学校などは、一九四五年一月一日に中華民国に接収されたが、廃止の勅令や総督府府令があるわけではないので、一般には一九四六年五月三十一日公布の勅令第二百八十七号「外地官署所属職員の身分に関する勅令」で職員身分が消滅したと解釈されている。<sup>(14)</sup>つまり、廃校になったという解釈は、廃校が法制度上の職員の消滅と同義であるという理解に乗っているとみてよいであろう。

それに対して、廃校でないという解釈も、廃止の勅令等がない以上可能な訳である。そうであれば、組織・施設は「接収」されて存続し、職員は日本の側に残って公務員の身分を失ったとする解釈も可能であろう。台湾ではむしろその理解の方が有力だといえそうである。尹章義氏のいう「接収主義」も、接収の対象が施設のみではなく、大学そのものである、つまり台北帝大は廃止されていない、という理解が接収当時からひろく存在していたことの現れではないか、思われる。そして、実際一九四五年には、台北帝大の教職員も接収の対象と理解した例をみるることができる。それは、中華民国政府から台北帝大接収のために派遣された三名の特派員が、教授を価格のつけよう

のない宝と位置づけて、戦利品一般と同様に扱うように指示したと伝えられている事例である。つまり教授も接収の対象に含めていた訳で、医学院では、その結果、教授のいわゆる「留用」(当時の公文上では「征用」または「留聘」<sup>15)</sup>が実現した<sup>16)</sup>という。

## 二 主要資料について

医学院成立初期の教員の配置とその変化を追究可能としたのは、一九四七年一月と同年六月の二冊のガリ版刷りの国立台湾大学全体の教職員名簿の存在である。二冊の名簿は、台湾大学歴史学系副教授吳密察氏<sup>ごみつさ</sup>から複写物の提供を受けたもので、従来、研究や周年記念誌に利用されたことのないものである。

二冊の名簿の一つは、『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』(以下『一月名簿』とよぶ)である。それは大学の全教職員の名簿で、学院、附置研究所等に分けて、教授、副教授、助教(日本時代の助手に相当)、助理(日本時代の副手に相当)の教職系職員のほかに、事務系職員、技術系職員もそれぞれの配置の所に掲げられている。記載されている事項は「職務」「姓名」「性別」「籍貫」「年齢」「到校年月」「永久通訊地址」「現在住址」「備考」である。掲載は、専門分野・診療科別(旧講座別)になっているが、明記されていない。医学院の部分では、院長と学院事務を掌る職員が書かれた後、解剖学以下、教職員が列挙されている。

もう一つは、『国立台湾大学教員名冊 民國三十六年六月』(以下『六月名簿』とよぶ)である。表紙のみ墨筆で書かれ、表紙の左下に「教務処製」と明記されている。やはり、学院、附置研究所等に分けて記載されているが、『一月名簿』と違って、掲げられているのは、学校長、教務長、院長、主任等の管理職以外は教授、副教授、助教

のみである。記載されている事項は「職務」「姓名」「性別」「籍貫」「年齢」「到校年月」「校内辦公室」「現在住址」「備考」である。医学院の場合、掲載は、専門分野・診療科別が明記されているほか、「校内辦公室」として所属する「研究室」が明記されている。曾士榮氏の明らかにしたさきの講座制の継承の過程からみて、その「研究室」が帝大時期の「講座」を引継いだものである。冒頭に医学院院長が掲げられ、そのあと解剖学研究室から順次記載されている。

なお、一九九九年八月現在、台北二二八纪念馆に、林漢章氏提供と記された表紙が墨筆（内部は未見）の『国立台湾大学教員名冊 民国三十六年一月』（教務処製）が展示されている。筆者はその内容を見る機会を得ていないが、標題から見て、『六月名簿』と同系列の名簿で、時点の異なるものであると思われる。従って、『一月名簿』と『六月名簿』は時点の異なる同じ系列の資料ではなく、別系統の資料らしい。

従来、医学院成立初期の教員人事の展開を物語る資料で、一般に流布されているものは、医学院関係の周年記念誌である『楓城四十年——国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊——』<sup>(17)</sup>（以下、副題略）、『台大医院耆百年』<sup>(18)</sup>、及び『台大医院百年懷旧』<sup>(19)</sup>のみである。その時期の刊行物としては、民国三十六年（一九四七年）に刊行された『台湾大学概況』が知られているが、その年の版には教員の名簿がなく、人事関係の情報を得ることができない。

『楓城四十年』は、一九八五年に台湾で発行されたもので、医学院成立初期の接収の様子が、座談会で体験をとおして語られている。ただ、日本時代にすでに医局に勤務していた人達が座談会を行いなから、恐らくは刊行当時の言論の制約との関係と想像されるが、日本時代についての回想が掲載されていない。一九九五年に刊行された『台大医院耆百年』と『台大医院百年懷旧』は、日本時代が叙述されているばかりでなく、日本の大学制度である講座制の存続や、帰国した日本人教員による日本の大学からの博士学位授与なども紹介されている。日本語で書か

れた回想もかなり掲載され、言論自由化の影響を思わせるが、『楓城四十年』刊行の時に比べ、台北帝大時代を知る人達に物故者が多くなり、組織の内側に関する継承については情報に著しい濃淡がある。しかし、以上の三書は、いずれも断片的にだが、ともかくも密度の濃い情報がかなり集められていて、さきの二冊の名簿について解釈を可能にしている。

また、一九七八年に医学部の日本側の同窓会で編集発行した『東寧会四十年—台北帝大医学部とその後—』は、医学院に勤める台湾人同窓生達が、日本人同窓生向けに、母校の戦後史をかなり詳細に紹介して(20)いて、上記三書を補完する情報が含まれている。

医学院成立初期の教員人事がどのような仕組みとなっていたかを解明するためには、台北帝国大学の末期の人事の情報も必要である。本稿は、主要な資料として『台北帝国大学一覽』の一九四三年(昭和十八年)版(以下『一覽』とする)を用いる。『一覽』は、大学の規則、教職員、在校生、卒業者等の情報を網羅的に掲載した定期刊行物で、教員名簿中には、一九四三年一月二月現在の教授、助教授、講師、及び助手が掲載され、助手は掲載されていない。教授についてだけその担当する講座の名称が書かれ、助教授、講師については担当する内容、あるいは科目名が書かれているのみである。助手についてはそのような記載もない。創立以来毎年定期的に刊行されていたもので、教員人事の変遷の概要を知ることができるが、戦況の悪化のため刊行が停つてしまい、一九四三年版が最後である。一九四五年一月一日の接収時点での教員名簿は、『移行清冊』といわれる書類に記載されたことが知られているが、<sup>(22)</sup>筆者は所在を確認しておらず、本稿では使用できていない。ほかに、台北帝大末期の教員人事をかなり詳細に掲載したものに、『台湾総督府官報』があるが、筆者はその記載の悉皆的な追跡は行っていない。

医学院の教員の経歴については、以上のほかに、元台湾大学医学院教授の張寬敏氏(23)に依頼して得た医学院

所蔵資料に基づくデータ、同窓会である景福校友会の会員名簿<sup>(24)</sup>、『日本博士録』<sup>(25)</sup>などの資料を用いた。また、これまで筆者が発表してきた口述歴史（オーラルヒストリー）<sup>(26)</sup>で断片的に現れていた情報も参考とした。

### 三 継承された教員組織

主要な資料である『一月名簿』と『六月名簿』の二つからは、講師以上のポストに関して、本稿の課題に関連する次の四つの事実を確認できる。第一に、台湾大学初期の医学院の教員の配置は、帝大時期の教員の配置構成とほぼ同様であったこと、第二に、講師以上の個々の教員の配属に関しては、帝大時期に助手以上の職に就いていた者を配置し、それで充足できない場合に、助手その他の卒業者を充て、あるいは外部から教員を迎えていたこと、第三に、台北帝大時代の助手以上の職にあった者のうち、医学部出身の方が台北医専出身よりも多く医学院の講師以上に就任していたこと、そして第四に、外部から迎えた教員には四つの類型があったことである。ここ三では、以上の四つの事実を順に具体的に示していく。

そして、続く四では、医学院が、帝大時期の人員配置をかなり継承していたものではあっても、外部からの転入教員が組織の意思を左右するような役割を持っていたことに注目する。

#### (一) 教員の配置構成

台湾大学では、接収後間もなく全教員を新規に任用しているが、医学院の場合は、教員の配置構成は帝大時期末の教員の配置構成とほぼ同様のものとなった。それに関して従来、少なくとも次のような四つのことが知られてい

る。

第一に、従来勤めていた日本人教授は、一名を除き留用されて各科に配置された<sup>27</sup>。第二に、台湾大学は、『移交清冊』（接収資産等の内容が書かれている）に基いて一九四五年一月一日に、それまで有給の教員であった人達を教員に任用した。第三に、その後、医学院で編制内の欠員を補う任用を続けていくこと、及び編制外の医師を無薪助理医師（無薪は無給の意）として採用することに大学側が同意した<sup>28</sup>。また第四に、各研究室あるいは各診療科の内部の教員配置は旧講座とほぼ同様で、それぞれに教授、副教授、講師、助教、三名の有薪助理医師（有薪は有給の意）、及び数名の無薪助理医師が配置されていた<sup>29</sup>。以上の四つはまた、次の（二）で取り上げる教員個々の配置について従来知られていたことでもあり、どのような枠組みの中で個々の人事が行われたかを物語っている。

ここ（一）では、配置構成を一九四三年と一九四七年の教員数という面から比較することで、帝大時期の教員の配置構成が台大時期の教員の配置構成に踏襲されたことを確認する。従来、関係者の個々の断片的な回想で印象が語られてきたものである。

表1、表2、及び表3は、教員の構成を、台湾籍（戦後は中国籍）か内地籍（戦後は日本籍）かによって人数の面から一九四三年一月、一九四七年一月、及び同年六月の時点で整理したものである。表1で医学部に注目し、附属医専の方をあげていないのは、帝大時期は、助手は附属医専には配属されず、すべて医学部に配属されていたからである。また、講師以上は附属医専にも配属されていたが、その数は非常に少なく、のちに表9で示すように、学部兼任者二名を含めてわずか六名であった。そこで、表1を、医学院教員の配置を示した表2、表3と比較することで、組織の対応の概要が確認できる。副手についても助理医師と比較できれば、勿論実態をよりの確に把握できるはずだが、本稿で用いている資料の範囲では副手の配置は不明である。

表1 台北帝大医学部の教員構成 (1943年12月)

「内地」は戸籍が内地にあるもの  
 「台湾」は戸籍(戸口)が台湾にあるもの  
 空欄は人員なし  
 ( )内は学部外からの兼任で、外数  
 [ ]内は学部内からの兼任で、外数  
 \*は講座分担。\*\*のうち1名は内科学第三講座担任

講座名・授業名	教授		助教授	講師		助手	
	内地	台湾	内地	内地	台湾	内地	台湾
解剖学第一	1		2				
解剖学第二	1						
生理学第一	1				2		
生理学第二	1						
病理学第一	1		2				
病理学第二	1						
生化学	1				1		
衛生学	1		1(1)				
細菌学	1		1	[1]			
寄生虫学	1		1	1			
薬理学		1		2			
法医学	[1*]		1(1*)				
内科学第一	1					37	26
第二	1		3**	2		(2)	(1)
第三							
外科学第一	1		2	1			
第二	1						
小児科学	1				2		
産科・婦人科学	1				2		
眼科学	1		1	2			
耳鼻咽喉科学	1		1	1			
皮膚科学・泌尿器科学	1		1	2			
精神病学	1		1	(1)			
歯科学	[2*]		1	1			
放射線治療学			1				
熱帯環境衛生に関する授業	(1)						
衛生学に関する授業	(1)						
医事法制				(1)			
仏蘭西語				1			
担当不明記				1			

出典：『台北帝国大学一覽 昭和十八年』1944年、台北帝国大学

表2 台湾大学医学院の教員構成 (1947年1月)

( ) 内は、外省籍教員で内数  
空欄は人員なし

教室・科名	教授		副教授	講師		助教
	日本籍	中国籍	中国籍	日本籍	中国籍	中国籍
解剖学	2	1(1)	1		1	
生理学	1		1			3
病理学		1(1)	1		1	3
生化学			1			4
衛生学	1			1	1	2
細菌学		1(1)			2	1
寄生虫学	1			1	1	2
薬理学		1	1		1	3
法医学	1				1	1
内科第一内科	1				2	8
第二内科			1		2	12(1)
第三内科			1		2	4
外科第一外科	1		1		2	10
第二外科	1				2	12(1)
小児科					3	7
産婦人科			1		2	4
眼科	1	1(1)			2	2
耳鼻咽喉科					2	4
皮膚科・泌尿器科					2	3
精神科						2
歯科	1				1	1
漢方科		1			1	
放射線科		1			1	1

附属医院主任陳禮節氏を除いた。

副教授中村為吉 (担当不明、医学以外と思われる)、国文教員1名、国語教員1名はこの表では除いた。

出典資料中に教室名等が書かれていないので、筆者が便宜的に加えた。

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』

表3 台湾大学医学院の教員構成 (1947年6月)

( )内は、外省籍教員で内数  
空欄は人員なし

研究室名	教授		副教授	講師	助教
	日本籍	中国籍	中国籍	中国籍	中国籍
解剖学研究室	1	2(1)		1	1
生理学研究室	1		1		3
病理学研究室		1(1)	1	2	2
生化学研究室			1		4
衛生学研究室	1			1	2
細菌学研究室		1(1)		2	1
寄生虫学研究室		1(1)		1	2
薬理学研究室		1	1	1	3
法医学研究室				1	2
第一内科学研究室				3	8
第二内科学研究室			1	2	12
第三内科学研究室			3	2	6
第一外科学研究室			1	3	11
第二外科学研究室	1		1	2	16(1)
小児科学研究室		1		3	7
産婦人科学研究室			2	3	4
眼科研究室			1	2	2
耳鼻咽喉科研究室			1	2	3
皮膚科研究室				4	3
精神科研究室					2
歯科研究室				1	1
漢方科 (廃止)					
放射線科研究室		1		1	2

細菌学教授兼院長嚴智鐘氏は、医学院院長室が「校内辦公室」となっているが、ここでは細菌学研究室に加えた。

教授兼附属医院長陳禮節氏、教授兼附属医院副院長の邱賢添氏は除いた。国文教員2名、国語教員1名は除いた。

第二内科の助教范新皓は、表3の出典では省籍が広東だが、この出典では新竹となっており、外省籍助教が1名減となった。

出典：『国立台湾大学教員名録 民国三十六年六月』

表1は、『一覽』に掲載されている一九四三年一二月現在の資料に基づいて、教員の職階と本籍地の別を分けて数えたものである。教授は担任する講座名、助教授、講師については担当内容・科目名に従って表を作成した。助手についてはそのような区分が記載されていない。講師、助手については兼任の者が含まれており、また講師にはいわゆる非常勤教員も含まれている可能性があるが、現在のところ判明していない。

台湾籍の教員は、当時表1が示すように、教授に一名、助教授〇名、講師一名、助手二十七名であった。助手のうち台湾籍の者が四〇%を超えているが、他は著しく少ない。この出典からは確認できないが、(一)でもふれるように、その後、接収までの期間に助教授、講師へ昇進した例があつたほか、副手に数多く台湾籍の者がいたと言われている。

表2は、『二月名簿』に基づいて、一九四七年一月の教員配置を表1に対応させて数えたものである。名簿中の科別(研究室・診療科別)が旧講座別に対応していると捉えて作表した。副教授、助教は、それぞれ日本の助教授、助手に相当する。教授の内一名、講師の内二名が日本籍だが、他の教員のほとんどが台湾籍で、また外省籍の教員も(一)内に台湾籍の内数として示した数だけいた。日本籍の講師の二名はいずれも六五歳を超えており、日本という非常勤講師の地位にあつたとみられる。

表3は、『六月名簿』に基づいて、一九四七年六月の教員を表1、表2と同様に数えたものである。日本籍の留用教員は四名に減少し、代つて副教授以下の教員が増加している。

以上の三表の比較から、一九四七年の時点では、研究室と診療科とを単位とした学院内の編制が、講師以上の教員の配置数も含めて、帝大時期に置かれていた講座をそのまま受け継いだものであつたことを知ることができる。異なっている点は、帝大時期の解剖学、生理学、及び病理学の第一、第二講座がそれぞれ一研究室に統合され、ま

た漢方科が新設された（但し六月には既に廃止）点だけである。

日本籍教授については、表2の一九四七年一月の時点では教授が一名だが、台湾大学成立当初の一九四五年末は、ほとんどの研究室、診療科に日本人教授が配置されていたと見られる。既に述べたように、原則として一科に一名ずつ日本人教授を留用で任用することが決められたと、伝えられているからである。表2の時点では、日本籍教員の引揚げによって、かなりの空きポストが生じていた訳である。

日本籍の教授の帰国によって生じた空きポストの内の幾つかについては、台湾籍及び外省籍の教員によって充当されたことがうかがわれる。表2では、台湾籍の教授は三名だが、帝大時期にすでに薬理学に台湾籍教授一名がいたので、新しく増えたのは漢方科一名と放射線科一名のみである。表3では一名増えて四名になったが、漢方科が廃止されているので、増加したのは解剖学一名と小児科一名である。すなわち放射線科、解剖学、及び小児科の三ポストで日本籍の教授の帰国したあとを埋める形となっている。外省籍の教員は、表2、表3とも教授が四名いるが、後に（四）で述べるように、実際に勤務していたのは、一月も六月も三名であった。その内二名は一月の時点で、すでに病理学と細菌学の日本籍の教授の帰国したあとを埋め、もう一名が六月には同様に寄生虫学のポストを埋めている。

なお、助教の人数は、内科、外科、小児科などで六人以上もいて、前述した講座制の配置よりもはるかに多い。恐らく診療との関係があると思われるが、その事情は筆者には確認できていない。

## （二） 教員個々の配置

医学院初期の教員人事では、帝大時期の台湾籍教員と、台北帝大医学部の台湾籍卒業者が中核となって組織が構

成されるような任用が行われた。日本籍の旧教員の教授任用は別として、帝大時期に助手以上の職に就いていた台湾籍元教員に講師以上のポストが与えられた。そして、それだけでは講座制の教員構成を充足できない場合に、助手その他の台湾籍卒業者を充て、あるいは外部から台湾籍又は外省籍の教員を迎えていた。一九四七年における講師以上の教員一人一人のそのような配置の実際は、『一月名簿』と『六月名簿』から確認することができる。

その教員配置の方式は、(一)で既知のこととして述べた四つの事実から推測できることでもある。なかでも、一九四五年一月一日に、それまで有給の教員であった人達を新規に教員に任用したという第二の点と、旧講座制と同様の教員配置をしたという第四の点の結果として、そのような人員配置が生れる蓋然性は非常に高かったといつてよいだろう。

表4は、一月と六月の講師以上の在職者について、研究室・診療科別に対照し、年齢を加えて列挙したものである。『一月名簿』では医学専修科が別に掲げられており、医学院に籍のない医学専修科の教員は表4には入っていない。表中の名前に下線の付いている者が多いことから、教員の大多数が、台北帝大医学部または台北医専の卒業者であったこと、そして中でも医学部卒業者の方が多かったことを知ることができる。

表5は、一九四三年末の時点で、医学部及び附属医専で助手以上の職位についていた台湾籍の人達の一覧表である。表4にあがっている教員の中には、表5に名前があがっている者がかなりいる。本稿三(一)の最初に掲げた四つの既知事実のうちの第二のとおり、助手の多くは任用になったが、その際に講師に昇進した形になった訳である。なお、筆者の知る範囲では、その後、接収までの間で一九四四年一月に李鎮源氏が助教授に昇進し、一九四五年二月に邱仕榮氏(当時は改姓名して岡本榮司氏)が講師に昇進している<sup>(31)</sup>。その他数名が講師に昇進していたといい、またあらたに助手も任用されていたと思われるが、筆者には確認できていない。

帝大時期に既に教員であつた台湾籍の人達で埋められなかつたポストについては、医学部卒業生以外にも適任者を求めていたことが、いくつかの資料からうかがわれる。

台湾籍の転入教員については、日本（内地）に人材を積極的に求めていたようである。「楓城四十年」中に掲載された邱仕榮氏の回想によれば、日本人教員がいなくなつた穴を埋めるため、接収直後には、台湾から日本に向けてラジオ放送し、日本にいる先輩の台湾人医師達に、台湾に帰つて台湾大学の病院を支えてほしい、と呼びかけたという。<sup>(32)</sup> また、邱氏の同じ回想<sup>(33)</sup>には、「一月名簿」以前の各診療科の教員配置が紹介されていて、表6のような暫定的な時期のあつたことを知ることができる。内科、外科の科名に日本人教授の名前が付いていることからわかるように、日本籍の留用教授がいたが、行政的な責任のある地位には就けないことになっていて、若手の教員も主任の地位に就いていた。表6中の各科の主任を『一月名簿』『六月名簿』と比較すると、二年後の一九四七年の一月または六月の時点（表4）は、暫定的な時期の主任よりも職位の高い教員がかなり任用されていて、教員の充足が進んだ段階である。

外省籍教員の転入については、卒業生以外に適任者を求めた範囲に入つていたかどうかは疑問である。表4には、数名の外省籍教員の名を見ることができ、その限りでは、台湾籍の転入教員と同様に人選され、台北帝大卒業生で充足できないポストに任用されているように見える。しかし、後に四で述べることだが、一部の人選は不明朗で、大学の外で行われた決定で任用されたのではないかと見られる。

### (三) 講師への内部昇任と台北医専卒業生

帝大時期に医学部の助手であつて、医学院の講師以上に採用された台湾人には、学部卒業生が多く、台北医専卒

表 4 1947 年の医学院の教員の配置

	1947 年 1 月現在	1947 年 6 月現在
学院院長	① 杜聰明 (55)	① 嚴智鍾 (58)
解剖学研究室	① 湯靈虞 (50) ① 森於菟 (58) ① 金閔丈夫 (51) ② 余錦泉 (34) ③ 蔡滋理 (31)	① 湯靈虞 (50) ① 嚴智鍾 ① 金閔丈夫 (51) ① 余錦泉 (34) ② ———— ③ 蔡滋理 (31)
生理学研究室	① 細谷雄二 (50) ② 邱徳金 (55) ③ ————	① 細谷雄二 (50) ② 邱徳金 (55) ③ ————
病理学研究室	① 葉 暉 (40) ② 程丁茂 (37) ③ 黃當時 (32)	① 葉 暉 (40) ② 程丁茂 (37) ③ 黃當時 (32) ③ 郭阿藩 (31)
生化学研究室	① ———— ② 董大成 (32) ③ ————	① ———— ② 董大成 (32) ③ ————
衛生研究室	① 大瀬貴光 (39) ② ———— ③ 堀内次雄 (75) ③ 陳拱北 (31)	① 大瀬貴光 (39) ② ———— ③ 嚴智鍾 (58) ③ 陳拱北 (31)
細菌学研究室	① 嚴智鍾 ( ) ② ———— ③ 吳招唐 (30) ③ 詹湧泉 ( )	① 嚴智鍾 (58) ② ———— ③ 吳招唐 (30) ③ 詹湧泉 ( )
寄生虫学研究室	① 森下薫 (52) ② ———— ③ 横川定 (65) ③ 黃文賢 (38)	① 嚴智鍾 ① 李賦京 (48) ② ———— ③ 嚴智鍾 ③ 黃文賢 (38)
薬理学研究室	① 杜聰明 (55) ② 李鎮源 (32) ③ 彭明聰 (31)	① 杜聰明 (55) ② 李鎮源 (32) ③ 彭明聰 (31)
法医学研究室	① 鎌倉正雄 ( ) ② ———— ③ 蕭道應 (32)	① 嚴智鍾 ② ———— ③ 蕭道應 (32)
その他 (国語・国文)	② 中村為吉 (76) ○ 林凌霜 (59) ○ 傅宗彝 (42)	② 嚴智鍾 ○ 林凌霜 (59) ○ 傅宗彝 (42) ○ 葉步戡 (57)
医院院長	○ 陳禮節 (41) [附属医院主任]	① 陳禮節 (41) [附属医院院長] ① 邱賢添 (47) [附属医院副院長]
第一内科研究室	① 小田俊郎 (55) ② ———— ③ 翁廷藩 (33) ③ 陳萬裕 (31)	① 嚴智鍾 ② ———— ③ 翁廷藩 (35) ③ 翁廷藩 (33) ③ 陳萬裕 (31)
第二内科研究室	① ———— ② 林 茂 (36) ③ 王文杰 (32) ③ 林松城 (31)	① ———— ② 林 茂 (36) ③ 王文杰 (32) ③ 林松城 (31)

凡 例  
 ①は教授、②は副教授、③は講師、○は職階のない教員を指す。( )内は年齢、色の反転した番号の教員は日本籍、人名を□で囲った教員は外省籍、太字は6月までの転入者、///で消した教員は既に退職、□で消した教員は内部の他の研究室等への異動先、人名の肩の「▼」は内部の他の研究室等への異動先、人名の脇の「○」は1945年12月任用、人名の肩の「学」は大学卒業生、「専」は専門学校卒業生、下線付き人名は、台北帝大医学部又は附属医専(前身校を含む)卒業者(1947年6月の下線は初出のみ)。——は空きポスト。

第三内科研究室	① 〃 ② 〃 <u>鄧培禮</u> (35) ③ 〃 <u>許強</u> (35) ③ 〃 <u>宋瑞樓</u> (31)	① 〃 ② 〃 <u>鄧培禮</u> (35) ② 〃 <u>郭宗煥</u> (37) ② 〃 <u>張天縱</u> (37) ③ 〃 <u>許強</u> (35) ③ 〃 <u>宋瑞樓</u> (31)
第一外科研究室	① 〃 <u>鄧澤田平十郎</u> (53) ② 〃 <u>徐傍興</u> (39) ③ 〃 <u>邱水生</u> (33) ③ 〃 <u>林敬邦</u> (33)	① 〃 <del>鄧澤田平十郎</del> ② 〃 <u>徐傍興</u> (39) ③ 〃 <u>林天祐</u> (35) ③ 〃 <u>邱水生</u> (33) ③ 〃 <u>林敬邦</u> (33)
第二外科研究室	① 〃 <u>河石九二夫</u> (53) ② 〃 ③ 〃 <u>鄧澤生</u> (34) ③ 〃 <u>洪俊坤</u> (31)	① 〃 <u>河石九二夫</u> (53) ② 〃 <u>謝振仁</u> (39) ③ 〃 <u>鄧澤生</u> (34) ③ 〃 <u>洪俊坤</u> (31)
小児科研究室	① 〃 ② 〃 ③ 〃 <u>鄧澤生</u> (34) ③ 〃 <u>洪俊坤</u> (31)	① 〃 <u>魏火曜</u> (40) ② 〃 ③ 〃 <u>陳炯霖</u> (31) ③ 〃 <u>林我澤</u> (34) ③ 〃 <u>許燦煌</u> (33)
産婦人科研究室	① 〃 ② 〃 <u>邱仕榮</u> (35) ③ 〃 <u>王經綬</u> (33) ③ 〃 <u>吳家鏞</u> ( )	① 〃 ② 〃 <u>邱仕榮</u> (35) ② 〃 <u>徐千田</u> (35) ③ 〃 <u>劉新台</u> (36) ③ 〃 <u>王經綬</u> (33) ③ 〃 <u>吳家鏞</u> (31)
眼科研究室	① 〃 <u>茂木宣</u> (51) ① 〃 <u>張錫祺</u> (50)(未到校) ② 〃 ③ 〃 <u>邱林淵</u> (32) ③ 〃 <u>胡鑫麟</u> (29)	① 〃 <del>茂木宣</del> ① 〃 <del>張錫祺</del> ② 〃 <u>楊蓋飛</u> (38) ③ 〃 <u>邱林淵</u> (32) ③ 〃 <u>胡鑫麟</u> (29)
耳鼻咽喉科研究室	① 〃 ② 〃 ③ 〃 <u>杜詩緝</u> (28) ③ 〃 <u>洪文治</u> (29)	① 〃 ② 〃 ③ 〃 <u>林天賜</u> (38) ③ 〃 <u>杜詩緝</u> (28) ③ 〃 <u>洪文治</u> (29)
皮膚科研究室	① 〃 ② 〃 ③ 〃 <u>謝有福</u> (32) ③ 〃 <u>吳萬耀</u> (33)	① 〃 ② 〃 ③ 〃 <u>謝有福</u> (32) ③ 〃 <u>吳萬耀</u> (33) ③ 〃 <u>羅慶鈞</u> (32) ③ 〃 <u>陳登科</u> (33)
精神科研究室	① 〃 ② 〃 ③ 〃	① 〃 ② 〃 ③ 〃
齒科研究室	★主任は 〃 <u>林宗義</u> (助教) ① 〃 <u>大橋平治郎</u> (54) ② 〃 ③ 〃 <u>郭水</u> (35)	★主任は 〃 <u>林宗義</u> (28)(助教) ① 〃 <del>大橋平治郎</del> ② 〃 ③ 〃 <u>郭水</u> (35)
漢方科	① 〃 <u>邱賢添</u> (47) → 科廃止 ② 〃 ③ 〃 <u>翁廷俊</u> (35)	① 〃 <u>邱賢添</u> ② 〃 ③ 〃 <u>翁廷俊</u>
放射線科研究室	① 〃 <u>黃演燦</u> (39) ② 〃 ③ 〃 <u>王光柱</u> (32)	① 〃 <u>黃演燦</u> (39) ② 〃 ③ 〃 <u>王光柱</u> (32)

出典：教員構成と年齢については『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』及び『国立台湾大学教員名冊 民國三十六年六月』を用いた。研究室名は、漢方科以外は後者の名簿に拠った。邱林淵は、他の資料では邱林淵となっている。学歴については『台北帝国大学一覽 昭和十八年』1944年、『日本博士録』1956年、『台大医院百年懷旧』1995年の情報を用い、張寬敏氏による医学院所蔵資料の調査を加えた。( )内空欄は名簿中の年齢が空欄のもの。

表5 1943年の台湾籍教員の1947年の配置

①は教授，②は副教授，③は講師，④は助教  
番号前の「専」は医学専修科所属を示す。

→は、1947年1月から6月の間の異動

1947年1月の医学専修科の配置は、1月に医学院に籍がない場合のみ示した。配置が空欄の者はすでに退職。

1943年12月の配置		1947年の配置		
医 学 部	教授 杜聰明	薬理学（1月は院長）	①	
	講師 井上朝欽（李朝欽）			
	助手（専門学校出身） 廣田克仁 徐傍興 藤永宗昭（蔡垂昭） 武澤肇 林嘉祐 翁器座 莊金繩 張新之助 詹益恭 翁廷俊 楊貴盛 范緒榮 澄欽	（不明） 第一外科  （不明） 医学専修科→第一外科  （不明）  漢方科→第一内科  第二外科	②  専③→③  ③→③  ④	
	助手（大学出身） 齋藤桂三 許燦煌 李鎮源 邱淵泉 詹湧泉 余錦有 謝福茂 林文治 洪榮治 岡本榮成 鐘有禮 鄭培禮 金山善行	（不明） 小兒科 薬理学 眼科 細菌学 解剖学 皮膚科 第二内科 耳鼻咽喉科 産婦人科  第三内科 （不明）	③ ② ③ ③ ②→① ③ ② ③ ② ②	
	教授 杜聰明 [学部から兼任]	（学部を見よ）		
	助教授 吉田龍生（董大成） 福山千田（徐千田） 翁嘉器 [学部へ兼任]	生化学 医学専修科→産婦人科	② 専①→②	
	講師 張天縱 富永祐康	医学専修科→第三内科 （不明）	専③→②	

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』、『国立台湾大学教職員名冊 民國三十六年六月』、『国立台湾大学医学院・台大嶽福基金会（編印）『楓城四十年—国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊—』1985年、『台大医院百年』1995年，国立台湾大学医学院附設醫院，『台大医院百年懷旧』1995年，国立台湾大学医学院附設醫院，『台北帝國大学一覽 昭和十八年』1944年，台北帝國大学

表6 附属医院の責任者（接收直後）

②③④は1947年の1月または6月の時点での職務。

②は副教授，③は講師，④は助教。

→は、1947年まで科の主任を継続。

( )内は1946年初の年齢。年齢空欄は1947年には勤務していない。

内科	
第一小田内科	翁廷俊(34)③→(途中, 漢方科へ)
第二桂 内科	林 茂(35)②→
第三柳田内科	鄭培禮(34)②→
外科	
第一澤田外科	徐傍興(38)②→
第二河石外科	方錫玉( )
婦産科	邱仕榮(34)②→
小児科	鐘有成( )
耳鼻科	杜詩綿(27)③・洪文治(28)③
眼科	邱林淵(31)③
X光科	王光柱(31)③
精神科	胡兩神(26)④
皮泌科	陳登科(32)③・謝有福(31)③→
齒科	林宗生( )
營養部	許 強(34)③
護理部	賴肇東( )
薬局	詹国樑( )

出典：邱仕榮「光復前後の台大医院」『青杏』第18期（復刻，『楓城四十年』1985年，50頁）

年齢は推定したもので、『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』及び『国立台湾大学教員名冊 民國三十六年六月』に書かれている年齢から1減じた数である。

方錫玉氏は、梁金銅「外科碩彦一方錫玉医師專訪」『方錫玉校友捐贈医学文物專輯』（国立台湾大学医学院101週年院慶紀念特刊）（1998年，国立台湾大学医学院，16頁）によれば、1914年1月生れなので、1946年1月には32歳である。

業者が少ないという偏りがあり、一九四三年と一九四七年の教員の経歴を確認することで、その事実を把握できる。組織の継承を教員人事という点から捉えるのであれば、その偏りは、医学院が、継承の骨格としてとった組織が医学部の方であったことを反映していると思われる。

帝大時期には助手数は、医専卒が学部卒よりも多めであった。表7は、一九四三年一二月の時点の医学部の助手

数を、台湾籍と内地籍の別に、大学卒（学士）と医専卒とに分けて数えたものである。しかし、表4によれば、講師以上の多くは医学部卒（他大学も含む）で、人数比は明らかに逆転している。

表8は、見方を逆にして、帝大時期の台湾籍助手が、その後、一九四七年一月あるいは六月の時点で、医学院の教職を得ていたかどうかを、学部出身と医専出身に分けて一覧にしたものである。学部卒業者がほとんど講師以上になっているのに対して、医専卒業者は必ずしもそうではないことがわかる。表9は、医学部と附属医専の講師以上の台湾籍教員について同様に一覧にしたものである。

以上のことから、帝大時期末期の台湾籍教員のうち、主に医学部卒業者が、助手から講師、講師から副教授への昇進という形で、医学院の教員に任用され、台北医専卒業者の多くが退職したことを知ることができる。

その理由を筆者は今のところ探り当てていないが、前提として考慮しなければならないのは、当時の日本の学校教育上の枠組みである。台北医専は、学校系統の上では、大学予備教育を行う高等学校とほぼ同段階の学校階程にあったため、社会通念からは、その卒業者が大学の教員となるのは尋常のことではないとされていたことである。

ただ、医学院成立に際して、その通念が実際に機能したことを物語る資料を筆者は見出してはいない。なお、助手の半数程度を占めていた日本人（内地籍）の助手の方に昇進の機会が開かれなかったという点で、日本の大学の昇進選考の本来のあり方から多少の歪みがあった訳だが、その通念を機能させないほどの影響はなかったはずである。

そのような教員人事に、医学部卒業者优先の原則があったのか、別の理由があったのかについて言及した文献で、筆者の気付いたものは次の一点だけである。それは『楓城四十年』の座談会で李鎮源氏が述べたもので、八方に人材を求めた結果、台湾大学（台北帝大医学部）出身者が多くなったのであって、医学部卒と台北医専卒とを区別せず、また日本帰りと大陸出身者とを区別していなかったと説明している。そして「いわゆる台大幫」（原文は、「所

表7 台北帝大医学部助手の構成  
(1943年12月現在)

( )内は学部外からの兼任で、外数

	台湾籍	内地籍
学士	12	17(1)
学士以外	14(1)	20(1)

出典：『台北帝国大学一覽 昭和十八年』1944年

謂「台大幫」は誤解だと語っている<sup>(34)</sup>。

次に、人事の実態に関する事実を三つ指摘しておきたい。いずれも、教員人事のありかたをさぐる時に考慮しなければならぬものである。

第一は、病院の帰属の変更で台北医専卒業者が影響を受けたのではないか、ということである。一九四七年一月に医学院第二附属医院が台湾大学から切り離されて、省立台北医院（現・市立中興医院）となった<sup>(35)</sup>。第二附属医院は、帝大時期の赤十字病院を接収して設けたもので、帝大時期には附属医専の方の実習病院に位置づけられていて、従って勤務医も医専卒業者が多かったとみられる。筆者は正確な名簿を入手していないが、同医院の分離をきっかけに、台北医専卒業者の中で台湾大学の教職を去った者がかなりあったと思われる。

第二は、業績主義、能力主義が相当程度機能したのではないか、ということである。附属医専の教授であった広畑龍造氏（一九二三年八月二〇日から一九四三年一月一〇日在任<sup>(37)</sup>）の回想にそのことを窺わせるものがある。回想によれば、台北医専出身の董大成氏（当時は改姓名して吉田龍生氏）は生化学実験で、他の者が特定できない物質を度々確認し、その面できわだった能力を持っていた<sup>(38)</sup>。董大成氏は、帝大時期にすでに附属医専の医化学の助教授となり、医学院でも生化学の副教授の職位を得ている。

第三は博士号の問題である。現在の台湾では、一般に博士号の有無は大学の教員を採用する際に関係してくるが、医学院の場合は必ずしもそうではなく、特に医学院成立の初期には全く事情が違っていたようである。表8、9が、医専卒の講師・

助手もほとんどが博士号を取得していたことを示しているからである。むしろ医専卒業者の方が、一九四五年までに学位を取得した者の割合が高く、また大学卒業者の方では医学院で講師以上の職に就いた後、博士号を得ている例さえもある。そうした事實は、医学院の初期の教員任用が、博士学位授与制度をふまえて行われたものではなかったことを示している。

以上の三点は、しかし、一九四五年一月の接収から一九四六年末までの教員人事の展開を逐一追跡したものである。医学院の教員に学部卒業者の方が多く任用された理由を突き止めるには不十分である。その一年数ヶ月の間に、さきの第一の事實やその他の突発的な事情で台北医専卒業者が退職したというに過ぎない可能性もあるからである。

結果的に見れば、ここでみてきた内部昇進が、医学院組織の骨格となるものであった。理由のいかんにかかわらず、医学部卒業者が多数を占めたということは、組織だけでなく、医学院の雰囲気も、附属医専ではなく、学部の方に近くなることを促したものと思われる。

#### (四) 転入教員の類型

台湾大学成立初期に、医学院に外部から講師以上の職位で採用された教員は、その出身地と経歴から次の四つの類型に分けることができる(但し一部の教員は重複する)。

- ① 日本内地または中華民国で医師となり、日本内地または台湾において台北帝大以外で実績をあげていた台湾籍の者、
- ② 外省籍の者、
- ③ 医学専修科の教員から転属してきた者、及び
- ④ 台北医専出身で、台湾内において大学外で実績を上げていた台湾籍の者の四類型である。以下では外部から採用した教員を便宜的に転入教員と呼ぶことにする。

表10は、転入教員を筆者が確認できた範囲で列挙したもののだが、③のうち、医学部または附属医専出身者は、実質的に内部にいたとみなせるので、除いて掲げた。<sup>39)</sup> 本稿四で、以後の展開に言及するので、表には一九四七年六月以後数年間の例も加えた。

以下、類型ごとに教員を列挙して、その学歴、職歴等を簡単にあげておくことにしたい。

①について。二つの名簿の中には、鄭澤生、魏火曜、林我澤、林天賜、程丁茂、黄演燎、及び謝振仁の六氏の名をみることが出来る。出身は、鄭氏と林我澤氏が熊本医大、魏氏が東京帝大医学部、林天賜氏が京都帝大医学部、程氏が東京医専、黄氏が大阪帝大医学部だが、程氏以外の五氏は、台北高等学校から大学へ進学している。ほかに衛生研究室の陳拱北氏が慶応義塾大学医学部卒業であり、①に入るのではないかと思われるのだが、筆者は未確認である。

魏氏については『楓城四十年』に掲載された断片的な経歴によれば、一九四六年四月に厦門から戻り、医学院第二附属医院に勤務したが、その後医学院第一附属医院に移籍したという。<sup>40)</sup> 魏氏は『一月名簿』では医学院には籍がなく、医学専修科の教授であったが、『六月名簿』では医学院の教授になっている。

謝氏は台湾籍だが、中華民國の国立中山大学医学院を卒業している。名古屋帝大で医学博士号を得、その後、一九四二年から一九四六年三月にかけて日本の静岡厚生医院院長兼外科部長を務めたあと台湾に來た。第二附属医院外科主任を務めた後、第一附属医院の外科主任になったが、一九四八年七月には広州中山大学医学院教授兼外科主任に転出し、一九四九年には台湾の台中に戻っている。<sup>41)</sup>

また医学院長杜聰明氏は、日本で外科の権威となっていた東京帝大医学部出身の高天成氏を医学院長となるように招聘した<sup>42)</sup>というが、『六月名簿』の段階ではまだ名がない。

年 12 月在職) の経歴と 1947 年の配置

①は教授, ②は副教授, ③は講師, ④は助教。番号前の「専」は医学専修科所属を示す。台北医専は, 台北帝大附属医専とその前身校を指すが, 総督府医学校は別に示した。

医学博士		1947 年の職位	
授与大学	認可年月	1 月	6 月
京都帝大	1923.12.14	医学院長	①
台北帝大	1945. 9. 21		
台北帝大	1946. 6. 17		
台北帝大	1944. 3. 15	②	②
台北帝大	1945. 3. 6	(不明)	(不明)
(不明)	(不明)	専③	③
台北帝大	1945. 9. 21		
台北帝大	1944. 7. 31		
台北帝大	1945. 3. 10		
台北帝大	1944. 3. 15		
台北帝大	1945. 3. 6	(不明)	(不明)
台北帝大	1946. 6. 17		
台北帝大	1945. 9. 24	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	④	④
-----			
京都帝大	1945.11.16	(不明)	(不明)
台北帝大	1946. 6. 17	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	②	②
台北帝大	1946. 6. 17	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	②	①
東京大学	1953.10.20	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	②	②
京都大学	1950. 4. 12	③	③
台北帝大	1946. 6. 17	②	②
台北帝大	1946. 6. 17		
台北帝大	1946. 6. 17	②	②
(不明)	(不明)	(不明)	(不明)

なお、翁廷俊<sup>おうちんしゅん</sup>氏の回想によれば、一九四六年五月から翌年三月までの間は日本から帰ってきた台湾籍の学生と医師が特に多く、第一内科では、台北帝大卒業で接収当初から在職していた医師と、日本帰りの医師が別のグループを形成していたほか、新しく日本から戻った医師がまた別のグループになったという<sup>(4)</sup>。

湾大学教員名冊 民国三十六年六月】、『日本博士録』(1956年, 教  
『楓城四十年—国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊—』1985年,  
『台北帝国大学—覧 昭和十八年』1944年

表 8 台北帝大医学部の台湾籍教員 (1943)

氏名 (改姓名前の姓名)	担当	出身校
教授 杜聰明	薬理学	総督府医学校
講師 井上朝欽 (李朝欽)	小児科学	台北医専
助手 (専門学校卒業) 廣田克仁 徐傍興 藤永宗昭 (蔡垂昭) 武澤 肇 林天祐 翁嘉器 莊金座 張克緝 林新之助 詹益恭 翁廷俊 廖貴盛 楊緒榮 范澄欽	医専から兼任	台北医専 台北医専 台北医専 (不明) 台北医専 台北医専 台北医専 台北医専 日大専門部 台北医専 台北医専 東京医専 日大医専 (不明)
助手 (大学卒業) 齋藤桂三 許燦煌 李鎮源 邱林淵 詹湧泉 余錦泉 謝有福 林 茂 洪文治 岡本榮治 (邱仕榮) 鍾有成 鄭培禮 金山善行		医学士 (九州帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (長崎医大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (台北帝大) 医学士 (九州帝大) 医学士 (不明)

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』、『国立台湾行政研究所』、国立台湾大学医学院・台大景福基金会(編印)『台大医院壹百年』1995年、『台大医院百年懷旧』1995年、

②について。二つの名簿の中に、陳禮節、葉曙、張錫祺、嚴智鍾、湯肇虞、及び湯の四氏である。湯氏と李氏については筆名で、名簿の上では六月の時点で張氏が減じ、李氏が増加している。六名の内、『六月名簿』に掲載された時期までに医学院に勤務したことが確認されているのは、陳、葉、嚴、及び湯の四氏である。湯氏と李氏については筆

(1943年12月在職)の経歴と1947年の配置

①は教授、②は副教授、③は講師、④は助教。  
 番号前の「専」は医学専修科所属を示す。  
 台北医専は、台北帝大附属医専とその前身校を指すが、  
 総督府医学校は別に示した。  
 1947年1月の医学専修科の配置は、1月に医学院に籍がない場合のみ示した。

医学博士		1947年の職位	
授与大学	認可年月	1月	6月
京都帝大	1923.12.14	医学院長	①
九州帝大	1945. 4. 6	②	②
九州帝大	1945. 2.27	専①	②
台北帝大	1944. 7.31		
台北帝大 (不明)	1946. 6.17 (不明)	専③ (不明)	② (不明)

湾大学教員名冊 民国三十六年六月】、『日本博士録』(1956年, 教  
 『楓城四十年—国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊—』1985年,  
 『台北帝国大学一覽 昭和十八年』1944年

者に経歴が把握できていないが、他の四氏は日本で医学教育を受けている。

陳氏は、日本の第一高等学校理科、京都帝大医学部卒業で、福建省立医学院内科学教授から台湾大学医学院教授に転任して来た。『二月名簿』では医院主任、『六月名簿』では医院長となっている。その後一九四八年七月には浙江省立杭州医院医院長兼浙江省立医学院内科学教授に転出している。葉氏は、千葉医大を卒業し、同大学で博士号を取得し、上海東南医学院に勤務しているときに台湾大学に招聘され、一九四六年八月一日に着任した。<sup>(46)</sup> 嚴氏は、東京帝大医学部を卒業後、北京伝染病院院長、軍医学校校長を経て、台湾大学医学院の教授となった。<sup>(47)</sup> また、張氏は『二月名簿』で「未到校」とされ、『六月名簿』では名がないが、千葉医大医学専門部卒業で、千葉医大で博士号を得ている。

湯氏については、『台大医院百年懷旧』中の林槐三氏の回想によれば、解剖学科(基礎医学)の各研究室を、医学系の組織の

表9 台北帝大附属医学専門部の台湾籍教員

氏名 (改姓名前の姓名)	担当	出身校
教授 杜聰明	薬理学 [学部から兼任]	總督府医学校
助教授 吉田龍生 (董大成) 福山千田 (徐千田) 翁嘉器	医化学 産科学・婦人科学 寄生虫学 [学部へ兼任]	台北医専 台北医専 台北医専
講師 張天縱 富永祐康	内科学 内科学	台北医専 (不明)

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』、『国立台湾行政研究所』、国立台湾大学医学院・台大景福基金会(編印)『台大医院老百年』1995年、『台大医院百年懷旧』1995年、

上では「学科」とよんでいる)にいたこと  
はいたが、誰の紹介で来たのか、またいつ  
解剖学科を去ったのか、学科内の誰も知ら  
なかったという。<sup>(48)</sup>『楓城四十年』中の座談  
会や解剖学の部分には言及がない。また李  
氏は、『六月名簿』の方にだけ現れるが、  
『楓城四十年』中の座談会や寄生虫学科の  
項に言及がなく、<sup>(49)</sup>その後勤務したのかど  
うか疑わしい。

なお、『六月名簿』以後、まもなく赴任  
した例として湯器、方懐時<sup>ほうかいじ</sup>両氏をあげるこ  
とができる。

③について。表11は、一九四七年一月の  
時点の医学専修科所属の教員を列挙したも  
ので、該当する教員のほとんど、あるいは

全てが含まれている。『二月名簿』には、医学専修科の教員として別個に掲げられた教員が、『六月名簿』では医学  
院に含まれて掲げられている。表11ではその関係を整理してあり、一月の時点で医学専修科に籍があつて、医学部  
に籍のなかつた教員の内、陳登科、郭宗煥、林天賜、魏火曜、陳禮節、徐千田、謝振仁、張天縱、林天祐、及び楊

(講師以上)の経歴

着任時期は、医学専修科に先に任用されている場合は、それによる。

前任地	出身校	博士号授与大学 認可年月日	備考
開業医師	台北高校・ 京大医 台北医専	京大医博 1944.8.5 東大医博 1937.7.19	
雲林県で開業	台北高校・ 熊本医大 総督府医学 校	熊本医博 1945.6.29	1947.1以前に退職か
元・附属医学専門 部教授	台北医専	京大医博 1934.4.5	『一月名簿』では教授 『六月名簿』では副院長
開業医師	台北医専	台北医博 1942.3.18	1947.1以前に退職か
福建省立医学院内 科教授 廈門	一高・京大 医		1948.7浙江省立杭州医院
日本静岡厚生医院 院長	台北高校・ 東大医 国立中山大 学医学院 台北高校・ 熊本医大	東大医博 1944.3.4 名古屋医博 1945.2.19	改姓名は大梁火曜
上海東南医学院	東京医専・ 千葉医大 台北高校・ 阪大医 東京医専	千葉医博 1938.2.7 阪大医博 1942.2.27 千葉医博 1943.1.9	
広東	台北医専		
北京伝染病院院長、 軍医学校校長	千葉医大專 門部 東大医	千葉医博 1944.7.18	『六月名簿』に名前なし
北京 大陸	国立北平大 学医学院 浙江省立医 薬専門学校 台北医専	慶応医博 1940.3.25 名古屋医博 1952.5.15	
元・長春医学院院 長	台北医専	京大医博 1934.1.22	
日本 省立嘉義医院産婦 人科医長	東大医 台北高校・ 東大医	東大医博1938.6.29 東大医博 1943.3.30	
省立新竹医院院長	慶応医	慶応医博 1940.7.15	

国三十六年六月], 『日本博士録』1956年(教育行政研究所), 国立台湾大学医学院・台  
1985年, 『台大医院耆百年』1995年(国立台湾大学医学院附設医院), 『台大医院百年懷

表 10 転入教員

	所属	新任者	職位	年齢	着任時期	省籍
『六月名簿』 までの 転入	耳鼻咽喉科	林天賜	副教授	38	1945.12	台湾
	生理学	邱徳金	副教授	55	1945.12	台湾
	第二外科	鄭澤生	講師	34	1945.12	台湾
	漢方科	楊克明	教授			台湾
	漢方科	邱賢添	副教授	47	1945.12	台湾
	寄生虫学	盧萬徳	教授			台湾
	医院長	陳禮節	教授	41	1946.1	湖北省
	小児科	魏火曜	教授	40	1946.4	台湾
	第二外科	謝振仁	副教授	39	1946.5	台湾
	小児科	林我澤	副教授	34	1946.6	台湾
	解剖学	湯肇虞	教授	50	1946.8	浙江
	病理学	葉 曙	教授	40	1946.8	湖北
	放射線科	黃演燎	教授	39	1946.9	台湾
	病理学	程丁茂	副教授	37	1946.10	台湾
	眼科	楊燕飛	副教授	38	1946.10	台湾
	寄生虫学	李賦京	教授	48	1947.1	陝西
眼科	張錫祺	教授	50	未到校	外省	
細菌学	嚴智鍾	教授	58	1947	河北	
『六月名簿』 以後, 1950年 頃まで	解剖学	湯 器	教授		1947	外省
	生理学	方懷時			1947	外省
	公共衛生	郭松根	教授		1948	台湾
	第二外科	高天成	教授		1949	台湾
	婦産科	魏炳炎	教授		1949	台湾
内科	蔡錫琴			1950	台湾	

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』、『国立台湾大学教員名冊 民大景福基金会（編印）『楓城四十年—国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊一』旧 1995年（国立台湾大学医学院附設医院）

燕飛<sup>えんぴ</sup>の各氏が、六月には医学院に籍を持つてゐることが示されている。事情は未詳だが、医学院と医学専修科とで、教授、副教授、講師、助教の職位が一致していない例も見られる。また、医学専修科に籍があつたが、六月の時に医学院に籍を持たなかつたのは、教授の徐少英氏<sup>じょしょうえい</sup>、講師の許汝鐵氏<sup>きょじよてつ</sup>の二人で、それぞれ湖南省籍、福建省籍である。魏氏及び陳禮節氏については、それぞれ①及び②でふれた。

医学専修科からの教員の転入は、医学専修科専属の教員が六月までに医学院に所属換えになつたために起こつたのではないかとみられる。医学専修科は、一九四六年四月に設けられたもので、日本内地で医学専門学校在籍中に帰台した学生を入学させ、一九五〇年七月に廃止となつたが、<sup>(50)</sup><sup>(51)</sup>『六月名簿』では一九四七年六月の時点で組織がなくなつてゐる。名簿が不正確といふこととなければ、組織が改められた訳である。あるいはさきに(三)でふれた、同年一月に第二附属医院が省立台北医院となつたことと関係している可能性もあるが、筆者には事実関係が確認できてゐない。表4には、六月の第二外科で講座制では異例の副教授が三名という配置が現れているが、それも組織の変更により教員が医学院に転属という形になつた結果ではないかと思われる。

なお、楊燕飛氏については、『楓城四十年』中の座談会で自身の経験が回想されている。楊氏は台北医専出身だが、一九四六年一〇月まで広東にて台湾に戻り、第二附属医院に勤務した。<sup>(52)</sup>『一月名簿』では医学院には籍がなく、医学専修科の講師だが、『六月名簿』で医学院副教授になつてゐる。

④について。邱徳金<sup>きゆうとくきん</sup>、邱賢添<sup>きゆうけんてん</sup>の両氏の名を挙げるができる。邱徳金氏は、台北医専卒業で、開業医だが東京帝大の医学博士号を持つてゐて、『一月名簿』と『六月名簿』中では生理学の副教授となつてゐる。医学院院長杜聰明氏<sup>とくめい</sup>が生理学に招聘したという。<sup>(53)</sup> 邱賢添氏もやはり台北医専卒業で、京都帝大の医学博士号を持つてゐる。

『二月名簿』中では漢方科の教授で、<sup>(54)</sup>『六月名簿』では医院副院長兼任になつてゐるが、一九三七年八月一九日から

表 11 医学専修科所属者の医学院の勤務

表は、1947年1月に医学専修科に所属していた教員の、1947年1月と6月の医学院での職務を示す。空欄は籍がない。  
 ①は教授、②は副教授、③は講師、  
 ④は助教、○は国語教員または国文教員、  
 ⇒は継続して在職していることを示す。  
 ×は医学院を退職したことを示す。  
 □は未判読

医学専修科 1947.1の職位	姓名	医学院の職位		
		1947.1	1947.6	
主任	葉 曙	①	①	
教授	杜聰明	①	⇒	
	森於菟	①	×	
	徐少英			
	小□謙			
	金関丈夫	①	⇒	
	陳登科		③	
	郭宗煥		②	
	林天賜		②	
	魏火曜		①	
	陳禮節		①	
	徐千田		②	
	黃演燎	①	⇒	
	小細静夫			
	小細谷雄二	①	⇒	
副教授	李鎮源	②	⇒	
	董大成	②	⇒	
	余錦泉	②	①	
	中村為吉	②	×	
	謝振仁		②	
	鎌倉正雄	①	×	
	大瀨貴光	①	⇒	
	邱德金	②	⇒	
	講師	林凌霜	○	⇒
		葉步戡		○
傅宗鐵		○	⇒	
許汝鐵				
蔡滋湮		③	⇒	
鄭水金		④	⇒	
里井宥二良				
彭明聰		③	⇒	
黃當時		③	⇒	
吳招唐		③	⇒	
黃文賢		③	⇒	
張天縱			②	
林天祐			③	
中村讓				
林我澤		③	⇒	
楊燕飛			②	
陳拱北	③	⇒		

出典：『国立台湾大学教職員録 中華民國三十六年一月』、『国立台湾大学教員名冊 民國三十六年六月』

同年一〇月二六日まで附属医専の教授であつたので、やはり在野から人材を求めた例なのではないかと思われる。ただ、最初は漢方科の副教授として杜氏に招聘され、教授は、雲林県で開業していて、やはり杜氏に招聘された楊克明氏であつたという。<sup>(56)</sup>しかし、『二月名簿』には楊氏の名前がなく、邱賢添氏が教授として掲げられているので、楊氏は一九四七年一月には既に退職していたものと見られる。

そのほかに、医学院長杜氏は、盧萬德氏を寄生虫学科に招聘したということだが、『一月名簿』と『六月名簿』には名前が掲載されていない。盧氏は台北医専卒業で、台北帝大の医学博士号を持っている。また、『六月名簿』

以後、間もなく赴任した郭松根<sup>かくしょうこん</sup>氏もこの類型としてよいであろう。同氏も医専卒業で、京都帝大の医学博士号を持つていて、台湾に戻る前は長春医学院院長であったという。<sup>(58)</sup>

転入教員は以上のような人達であった。組織の継承の上では、邱賢添、魏火曜、湯肇虞、葉曙、黄演燦、蔽智鍾、郭松根、高天成、及び魏炳炎の各氏の存在が注目される。彼らは、一九五〇年頃までに、組織に対する発言力の強い教授の地位で入って来て、組織の意思を決定する権限のある地位に就くことになる。

#### 四 組織の意思決定と教員配置

医学院における帝大時期からの組織の継承は、教員配置という面から見れば、本稿の三で示したようなものであった。筆者は、本稿一（二）で、従来(1)講座制の継承と(2)博士学位授与が、組織継承に関する断片的な事実として知られていることを紹介し、教員人事がその共通の土台だったという判断を示したが、その判断の基盤は三で示したような教員配置であった。すなわち、医学院初期の教員配置は、医学部の教員配置を数学の写像という同型のよりに踏襲したものであり、医学院の発足に際して外部から転入してきた教員は、大体は、帝大時期からの台湾籍教員、及び帝大時期から医局にいた医学部卒業者では埋められない組織の隙間に位置を得ていた。

ここでは、教授層に多くの教員が転入して組織の意思決定に関与する形になったことに注目し、その後の展開を見ておくことにしたい。三では、転入してきた教授層の人達が意思決定に関与したことについても言及したが、それを不連続性と認識するのであれば、医学院のその後の展開は、意思決定に関わる組織の中核のレベルでの不連続性が後退し、次第に医学部からの連続性が形成されるものであったといえる。

勿論、転入教員による組織の意思決定が、組織の継承に反することかどうかは議論の分かれるところである。大学は、本来生え抜きの卒業生のみが教員ポストに就任する組織ではないからである。しかし、台湾大学成立初期に起こったように、教授層に転入した人達が、すぐに組織の意思決定の中枢に収まるようなことは、間もなくなくなっている。その後は、主として医学部あるいは医学院を卒業した者が、長期にわたって医学院に勤続した後、昇進を経て意思決定に関与するようになっていった。教員配置という見方からすると、台湾大学成立初期よりも、むしろ二〇年以上も経た後の方が、帝大時期をよく継承したような組織となったと捉えることが可能であろう。

医学院組織の意思決定レベルでの歴史的展開は、帝大時期の卒業者が昇進していく以上、一見、自然なことのよう感じられる。台北帝大医学部が初めて卒業生を送り出したのが一九四〇年であり、台湾大学が成立した一九四五年当時は、殆どの卒業者の年齢がまだ三五歳以下であった。従って、医学院成立直後には教授層に多くの転入教員があり、意思決定のレベルに関しては、帝大時期からの連続性の稀薄な組織の様相を呈していた。そのような転入教員達が、年を経て、定年その他の理由で組織を去っていき、入れ替って、医学院の意思決定の仕組みに関与する教員達の多くが、医学部と医学院の卒業生達になっていった。<sup>(59)</sup>一方で、あらたに転入してくる教員も、組織を運営する役割を持つて中枢に入ってくる訳ではなくなり、現場の一員として入る形に変わっていった。<sup>(60)</sup>

しかし、組織の中枢を占める教員の構成に変化が起こっていったのは自然の成り行きの結果ではなかった。実は、組織の中枢に入る形で教員が突然転入して来ない体制の確立と、その変化とは表裏一体のことであったと筆者は判断している。少なくとも『六月名簿』よりもあとの時点では、転入教員の四類型のうちの第二の類型の外省籍の教員の転入が、抑制されたのではないかと思われる。さきに三(三)で紹介したように、李鎮源氏が日本帰りと大陸出身者とを区別していなかったと述べているので、あるいは日本帰りを含めて転入が抑制されたことも考えられる。

教員の転入の抑制は、その後の教員構成の進展、そして組織のあり方に非常に大きく影響したように思われる。ただ、第一の類型である日本（内地）帰りの医師の場合には、さらに後続が任用されて人数が増え、将来、組織のあり方を変容するような勢力となる可能性は全くなかったと判断できる。日本が外国となったことで、東京大学、京都大学を頂点とした進学構造から離脱し、同年代の卒業者同士の心理的な関係が変わってしまうからである。また他の二つの類型は医学院成立初期だけの例で、後々まで組織のあり方を左右するものではなかった。

転入の問題は、基本的には外省籍教員に係る人事上の問題であったと筆者はみている。林槐三氏が「台大医院百年懐旧」で紹介した二つの事例が、問題の質をよく物語っている。一つはすでに三（四）でふれた解剖学教授湯肇虞氏の例である。誰の紹介で就任し、いつ辞めたのか、同じ学科内の誰も知らない湯肇虞氏のような人事が起りえた。この例は、医学院の与り知らぬところ、恐らくは学外に人事権をもつところがあったことを物語るものである。もう一つは、一九四七年に就任した解剖学教授の湯器氏の例で、やはり人事選考に疑念を抱かせるものである。湯器氏は、表10に示したように、北平大学医学院卒業で、慶応義塾大学の医学博士号を得ていて、日本へ帰国した解剖学教授森於菟氏のを引継いで授業をしていたが、若手の指導を好まず、研究をせず、授業の水準にも問題があったという。そして、傅斯年氏が台湾大学の第四代校長（日本の学長に相当）として台湾に来ることを聞いて、北京大学で傅氏が校長在職中に多くの「日本派」（引用にあたって正確な情報を得られなかったが、「日本派」は日本帰りと親日派とを指すと思われる）の教員を解雇したことを思い起し、着任してくる前に自分から大陸へ帰ってしまったという。医学院教員として能力上の問題があったように思われるが、それだけでなく、大陸への帰り方から見て、採用に関しても不明朗なことがあったのではないかと想像される。

二つの事例は、当時、外省籍の教員について、一部に適正な採用人事が行われない場合があったことを暗示して

いる。そうした事情をみると、すでに示した表4、表10に未到校（任用されているが、着任していない）の教員の名前があがっているのも、採用の過程に疑問が感じられる。

そのような教員の転入の問題を實際に回避したのは、台湾籍教員の事実上の頂点にいて、当時医学院長の任にあった杜聰明氏であったと、今日多くの医学院関係者に信じられている。筆者が聞き及んでいるのは、次の二つの事例である。

一つは、国防医学院との合併を拒絶したことである。国防医学院は、軍の管轄下にある医学関係の単科大学である。一九四九年に大陸から台湾に移って来たが、間もなくして、国防医学院院長の林可勝氏りんかしょうから杜聰明氏に、抗戦時期の大学合併方式で台大医学院と合併して大学を経営しようという働きかけが行われた。杜氏がそれを受入れず、そのために実現しなかったと言われている。<sup>(63)</sup> 国防医学院の教員は大陸から来た外省籍の人達であったので、合併が行われれば、医学院の意思決定に外部から影響力が及び、恐らくは人員配置にまで大きな混乱が起こったことであろう。台北帝大医学部から継承されてきた組織の内実が根本から換えられる可能性が高かったと判断してよいだろう。

もう一つは、台湾大学校長となった傅斯年氏（一九四九年一月から一九五〇年一二月まで在任）の決定に関わるものである。すでに、鄭梓氏ていしの研究によって明らかにされているところによれば、傅氏は、台湾大学の改革の一貫として、医学院と附設医院は台湾籍の教授に運営をまかせるといふ措置をとり、中国大陸から台湾に来て医学院と附設医院の運営の手助けをしようという医学界の大家達の申し入れを全て謝絶したという。<sup>(64)</sup> そのような決定があったということであれば、外省籍の教員の転入を途絶する効果を持ったことは間違いないと思われる。ただ、筆者が医学院の関係者からたびたび聞く話では、そのような決定は、傅斯年氏の意味ではなく、当時医学院長であった杜

聰明氏の強い意思をやむなく受入れた結果であるという。また、その結果杜氏は傅氏と決定的に対立するに至つたのだとも言われている。

以上の二つは、組織が確立して行く頃になされたはつきりした対応だが、それに加えて医学院において形成されたシステムも副次的に教員転入を難しくしたのではないかと思われる。筆者が注目しているのは、すでにふれた講座制の実質的継承、日本からの博士学位の授与のほか、本稿ではこれまで言及していない住院医師制度である。

講座制の実質的継承は、教授の下に配置されたポストに空席が生じなければ新しい任用が行われなことを意味して、転入教員のためのポスト増設が制限される。医学院では、日本時代に教育を受けた教員の数が少なくなるまで、二〇年程度は影響が残つたのではないかといわれている。<sup>(65)</sup> 第二の日本からの博士学位授与は、海外留学で博士号を得た教員の流入を防いだのではないかと思われる。台湾大学成立初期の台湾では、博士号の取得は大学教員となるための必要条件ではなかったが、医学院で講師以上の多くが博士号を持っていたことは、外部からの教授、副教授の転入の理由として、学位における優位をあげることができないことを意味していたからである。第三の住院医師制度は一九五〇年に導入されたもので、やはり卒業生以外の教員の転入の機会を非常に小さくしたのではないかと思われる。この制度は、毎年の卒業生のうち何人かを大学に残し、病院住込みのような形で研修を続けさせ、選抜を繰返して昇進させるといふもので、一旦民間や他大学に出ると容易には大学に戻れないという仕組みである。三つのシステムは、それぞれがそれ自体の目的を持つものなので、印象で語るにとどめておくべきではなく、今後検証する必要があるが、少なくとも論理的には教員の転入を難しくするものなので、なかでも外省籍教員の転入を抑制する効果を持ったのではないか、と思われる。

ここ四では、台湾大学成立初期に、組織の意思決定に関わる中枢部を占めた転入教員に注目した。そして述べて

きた事実は、そのような意思決定への関与が当時の特殊な出来事に終って、結局継続しなかったということである。そのことは、組織の継承がむしろ初期よりも、しばらく時間をおいて顕著になったという理解の妥当性を示唆している。

## 五 おわりに—継承の成立過程とその背後

本稿の関心は、日本が設けた機関が、日本の施政下から中華民國への施政下に移行する際の組織の継承にあった。最後に、継承の成立過程の背後にある心の問題について、二つの点から言及することにした。一つは、何をもちて組織の継承と捉えるかという心の問題であり、もう一つは、継承の成立を支えた心の問題である。

まず、第一の点に関しては、通常、組織の継承は、組織が途切れずに連続的に変化することによって達成されると理解されていることに注意しておきたい。今日の台湾でも、継承の成立条件は、日本時代から途切れずに、中華民國の体制下に移行し、連続を保つたまま変化して今日に至っていることだと理解され、通常はそれに基いて周年記念行事が行われている。その捉え方を台湾大学で追究するのであれば、尹章義氏のいう「接収主義」の形成過程を解明することは、研究の主要な一焦点になるであろう。しかし、筆者は、台湾大学が台北帝大を継承したという台湾に広く行き渡っている意識は全く別のところから発しているように感じている。本稿が追究したのは、接収前後で台北帝大と台湾大学がどう途切れていないかという問題ではなく、接収後しばらくしてから、組織の中に生成された教員の配置であった。筆者はそれを継承意識の主要な源の一つだと感じている。

第二の点に関しては、筆者は、台湾大学における組織の継承が結実して行く過程に、当事者の間に様々な思いが

あつたことを感じている。一国の法令の下で設けられた組織が、他国の法令下に移行するということは、人々のレベルではどうにもならないことであつたとしても、単純なことではなく、事態は多くの人々の様々な意識の複合したバランスの上に進行したと考えられる。本稿は、医学院の初期の人事を悉皆的に追跡したのではなく、一九四七年を中心に幾つかの断面を切取つたものにすぎないが、それでも、組織の中にいた帝大時期の台湾籍の教員達の生きてゐる姿が浮かび上がつていたというのは、言い過ぎであろうか。そのような継承の成立する過程を、台湾大学に限らず、様々な組織において読み解いてゆくことで、国家が換るといふことに際会した人々が、台湾の未来や自身の個人的将来を、組織の継承にどのような託そうとしていたか、その心のありようが読み取れると筆者は考へてゐる。

ここにあげた二つの点は、国家を越えた組織の継承が二重の意味で心の問題であつたということだが、本稿はその問題を追究してこなかつた。本稿の問題関心は、背後の、より大きな精神史研究の地平に踏込んで行く一歩である、筆者は感じている。

#### 註

- (1) 教育部統計処(編)『中華民國教育統計 民國八十七年』一九九八年、教育部、一五二頁。
- (2) 国立台湾大学医学院・台大景福基金会(編印)『楓城四十年——国立台湾大学医学院四十週年紀念特刊』

一九八五年、五一―五二頁（李鎮源氏の発言）。

- (3) 台湾の現状は、一九九七年九月から使用され始めた国民中学一年（日本の中学一年に相当）の教科書『認識台湾（歴史篇）』の記述がよく示しているのではないだろうか。同書は、日本時代の遺産として、初等教育の普及、法治観念、時間観念、衛生観念の浸透などを指摘しているが、社会の基幹部分ともいえる組織の運営、行政の仕組みの近代性やその継承については殆ど言及していないからである。対象が中等教育一年次だという制約もあるうが、その背後には研究の蓄積の不足もあると思われる。

- (4) 中華民国六〇年（一九七一年）一月二二日教育部台(師)訓字第一八九三号令によれば、各校は校史室を設けることが定められた。しかし、中華民国六〇年（一九七一年）三月一〇日教育部訓育委員会台(師)訓字第五七三号函は「校史資料の蒐集は、光復の時から始め、日拠時期部分は簡略にし、但し皆無であつてはならない」（原文は中国語）としている（この令達は、台北市政府教育局編印『中等学校教育法令彙編』一九九五年六月、四二―一頁に所収）。これは、制限されていたことが明確に示された例である。

- (5) 尹章義『台湾近代史論』一九八六年、自立晚報、一一―一―三頁。

- (6) 台湾大学台湾研究社発行。一九九六年四月に創刊さ

れ、不定期ながら一九九九年五月現在で二号（一九九七年五月）まで発行されている。

- (7) 曾士榮「從「台北帝大」到「台湾大学」——戦後文化重編の個案研究（1945～1960）」『Academia——台北帝大研究』第二号、一九九七年五月、台湾大学台湾研究社、八一―〇頁。

- (8) 宋瑞樓「第三内科簡史」『台大医院老百年』一九九五年、国立台湾大学医学院附設医院、四七頁。

- (9) 前掲(2)、五〇―五一頁（翁廷俊氏の発言）。

- (10) 所澤潤（聴取り・編集・解説・註）・陳定堯（口述）「聴取り調査：外地の進学体験（IV）——樺山小から、

台北三中、台北帝大豫科、台北帝大医学部を経て、台湾大学医学院卒業——」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第四六巻、一九九七年、群馬大学教育学部、一二六、一七四―一七五頁。

- (11) 宋瑞樓、前掲(8)。

- (12) 『日本史大事典』第四巻、一九九三年、平凡社、五七四頁。

- (13) 『日本史広辞典』一九九七年、山川出版社、一三〇九頁。

- (14) 黄昭堂『台湾総督府』一九八九年（新装第六刷）、教育社、二七一頁。また、向山寛夫（編）『台湾台北州立台北第一中学校の沿革（年表）』、一九九一年、台湾台北州立台北第一中学校同窓会・麗正会、七六頁。

- (15) 張寬敏氏の教示による。
- (16) 前掲(2)、四九頁(翁廷俊氏の發言)。
- (17) 前掲(2)の函書。
- (18) 『台大医院七百年』一九九五年、国立台湾大学医学院附設医院。
- (19) 『台大医院百年懷旧』一九九五年、国立台湾大学医学院附設医院。
- (20) 『東寧会四十年—台北帝大医学部とその後—』一九七八年、東寧会。
- (21) 『台北帝国大学一覽 昭和十八年』一九四四年、台北帝国大学。
- (22) 前掲(2)、五〇頁(翁廷俊氏の發言)。
- (23) 張寬敏氏は、一九四四年九月に台北高等学校を卒業し、同年一〇月に台北帝国大学医学部に入學し、一九四八年六月に台湾大学医学院を卒業した。
- (24) 『台大景福校友会通訊錄』民国七〇年七月三十一日印刷、(一九八一年)。
- (25) 『日本博士録』一九五六年、教育行政研究所。
- (26) 所澤ほかの前掲(10)(二六八—二七二頁)のほか、所澤潤(聴取り・解説・註)・張寬敏(口述)「聴取り調査・外地の進学体験(II) —台北一師附小、台北高校、台北帝大医学部を経て、台湾大学医学院卒業—」(第四卷、一九九五年、一七六一—一八〇頁)、及び所澤潤(聴取り・編集・解説・註)・呂耀樞(口述)「聴

- 取り調査・外地の進学体験(V) —石光公学校から、台北高校尋常科、同高等科、台北高級中学を経て、台湾大学医学院卒業—」(第四七卷、一九九八年、二五三—二五四、二五八—二六一頁)に言及がある。
- (27) 前掲(2)、四九頁(翁廷俊氏の發言)。
- (28) 前掲(2)、五〇—五一頁(翁廷俊氏の發言)。
- (29) 前掲(2)、五〇頁(翁廷俊氏の發言)。回想では曖昧だが、助教は三名以下ということであつたらしい。
- (30) 『台湾総督府官報』第八〇三号、昭和一九年(一九四四年)一〇月二八日、二三四頁。一九四四年一〇月二五日付けで任ぜられている。
- (31) 王耀文・李卓然「邱仕榮教授事略」前掲(19)、五一頁。
- (32) 邱仕榮「光復前後の台大医院」『青杏』第一八期(影印復刻、前掲(2)所収、五〇頁)。
- (33) 同右。
- (34) 前掲(2)、五二頁(李鎮源氏の發言)。
- (35) 前掲(2)、三七六、三七七頁。
- (36) 前掲(2)、四八頁(李鎮源氏の發言)。
- (37) 前掲(2)、二三八頁。
- (38) 広畑龍造「研究生活50年の回顧(前編)」『中村学園研究紀要』第一号、一九六八年、中村学園大学・短期大学／家政学会、二四九—二五〇頁、及び広畑龍造「研究生活50年の回顧(後編)」『中村学園研究紀要』

第二号、一九六九年、中村学園大学・短期大学／家政学会、一八五頁。

(39) 『六月名簿』に見られる、解剖学教授余錦泉氏、及び病理学講師郭阿審氏は、『一月名簿』との比較によれば、それぞれ副教授、助教からの内部昇進である。

なお『六月名簿』に見られる皮泌科講師羅慶鈞氏は、名簿によれば台湾省籍で、前掲(2)によれば第二附属医院皮泌科のスタッフであったということなので、同医院の分離に伴って医学院に転入した可能性がある。

(40) 前掲(2)、五二頁(李鎮源氏の発言)及び五四頁(楊燕飛氏の発言)。

(41) 林吉崇「簡介前第二外科主任謝振仁教授」前掲(19)、一一〇頁。

(42) 前掲(2)、五二頁(李鎮源氏の発言)。

(43) 前掲(2)、六〇頁(翁廷俊氏の発言)。

(44) 林吉崇「台大医院第二任院長陳禮節教授尋訪記」前掲(19)、三七―三八頁。

(45) 葉曙『病理卅三年』一九八二年、伝記文学出版社、三六、一二五―一二六、四五一―四六二頁。

(46) 前掲(2)、六一頁(葉曙氏の発言)。

(47) 台大医学院百年院史(中冊)編輯小組『台大医学院百年院史(中)―光復後(一九四五―一九七九)』

一九九八年、国立台湾大学医学院、八六頁。

(48) 林槐三「大戦結末前後の解剖学科」前掲(19)、九二

頁。

(49) 蘇霽露「寄生虫学科暨微生物学研究所寄生虫学組簡介」前掲(2)、二〇―二二頁。

(50) 前掲(2)、五二頁(李鎮源氏の発言)。

(51) 前掲(20)、七四―七五頁。

(52) 前掲(2)、五二頁(李鎮源氏の発言)及び五四頁(楊燕飛氏の発言)。

(53) 前掲(2)、四九頁(李鎮源氏の発言)。

(54) 名簿中には漢方科と明記されていないが、前掲(2)、五〇頁(翁廷俊氏の発言)から漢方科であったことを知ることができる。

(55) 前掲(21)、二三七頁。

(56) 前掲(2)、五〇頁(翁廷俊氏の発言)。

(57) 前掲(2)、四九頁(李鎮源氏の発言)。発言の中では羅萬徳教授となっているが、盧萬徳教授の誤り。

(58) 前掲(2)、五五頁(魏火曜氏の発言)。

(59) 邱仕榮氏が一九六四年八月に附設医院の院長に着任した頃から、組織の中核に入るようになったと見られる。

(60) 金沢大学医学部を一九五五年に卒業して外科の教職に就いた許書劍氏は(前掲(19)、四二頁。但し当初の職位は不明)、『六月名簿』によれば、それに先立つ一九四七年二月に二十七歳で第二外科助教になっている。従って、三十五歳頃に医学院にポストを得たといつて

も、単に日本帰りという経歴が評価された訳ではない。

(61) 蕭超然・沙健孫・周承恩・梁柱・楊文燭(編著)

『北京大学校史(一八九八—一九四九)(増訂本)』(一九八八年、北京大学出版社、四〇五、四八五頁)によれば、正確には、傅斯年氏は、一九四五年一〇月から一九四六年六月(あるいは七月か)まで、校長胡適<sup>こてき</sup>氏の代理として校務にあたった。

(62) 前掲(48)。

(63) 前掲(2)、五六頁(李鎮源氏の発言)。また、李瓊月「四位台大医学院院長各有独特歴史意義」『黑白新聞周刊』一九九五年六月一八日〜六月二四日、六六一六七頁。

(64) 鄭梓「傅斯年与台湾高等教育之改革」鄭梓『戦後台湾議會運動史之研究—本土精英与議會政治(一九四六—一九五二)』(増訂版)一九九三年、著者刊、二二二—二二三頁。

(65) 一九九八年二月一日、国立台湾大学医学院顧問(元秘書)陳春雄氏の教示による。

## 謝辞

本稿の執筆には、張寬敏氏、及び吳密察氏から提供して頂いた資料が決定的に重要であった。一九九九年四月五日及び七日には張寬敏氏のご紹介で、表6に名前のあがっている方錫玉氏に直接お会いして聴取りをすることができ、一九四六年末以前の医局の様子イメージを形成することができた。また内容の確認には国立台湾大学医学院顧問(元秘書)陳春雄氏に負うところ大であった。各氏のご厚意に対して感謝の意を表す。

The Founding of the College of Medicine of National  
Taiwan University and Its Organizational Succession:  
In Search of the Taihoku Imperial University Connection

Jun SHOZAWA

The Faculty of Medicine of Taihoku Imperial University (FMTIU) became the College of Medicine of National Taiwan University (CMNTU) in 1945 following Japan's withdrawal from Taiwan. The transition entailed appointment of Taiwanese medical staff from FMTIU to the similar teaching positions at CMNTU. This employment continuity created a long-lasting perception that National Taiwan University and Taihoku Imperial University were one and the same institution.

The author of this article investigates the process of how CMNTU was re-organized, in order to present a more accurate historical account of the related events than the research to date.